瀬戸内晴美

まどう

上巻

まどろみ

上巻

瀬戸内晴美

新潮社

まどう 上巻

昭和53年5月30日　発行
昭和53年12月10日　10刷

著者　瀬戸内晴美
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71
電話 業務03(266)5111 編集03(266)5411　振替東京4-808
印刷所　株式会社金羊社
製本所　大口製本株式会社

定価　950円

© Harumi Setouchi, Printed in Japan, 1978.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

まどう 上巻 目次

魔訪う　7
栗の実　19
われもこう　32
曼珠沙華　45
わかれ枝　58
さざんか　71
萩もみじ　84
昼月　95
寒椿　108
冬の星　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木枯し 132
新雪 147
紅梅 160
初音 172
流雛 185
遺書 198
花がたみ 210
椿垣 222
人工滝 235

装幀　高山辰雄

まどう

上巻

魔訪う

はじめまして。

小説家に手紙など書いたことなく、まして小説家でありながら出家なさって尼さんになられたという人の不可解さが、今もって理解出来ない私が、あなたにお便りを書くなど、われながら自分の心がはかりかね、とまどうております。

小説を書く前に、読者から手記をつのるなんて、そんなものをネタにしなければ小説が書けなくなったのなら、いっそ、いさぎよくペンを捨てて、尼さん稼業にだけ専念して、毎日お念仏でもとなえている方がましじゃないかと、私、あなたの今度の新聞小説「まどう」の開始前に当って発表なさった「読者参加」とかいう企画にいささか失望いたしました。

大体、新聞をとっていましても、新聞小説などほとんど読んだことがないのです。小説に書かれた人生なんて、私のような生き方をしてきた人間には、何だか絵空事めいて、読んでいて、心がしらけてしまうのです。

新聞になぜ小説欄があるのか、新聞社にきいてみたいくらい。その分、「ベランダ菜園の手びき」とか、「欲望を押えず美しくやせる方法」などという実用記事をふやしてくれたらどんなにいいでしょう。

そんな私が、なぜあなたの新聞小説の予告に目と心を奪われたかと申しますと、さし絵をお書きになるのが辻村ジュサブローさんという意外性に惹きつけられたからなのです。

あなたのお書きになったものは、数多く読んでいるわけではありませんけれど、時々見かける随筆や、あなたの出家前、テレビでお話しになっていた時の印象で、少くともあなたが正直な方のように思われますので、私の不躾にすぎる正直さも許していただけるのではないかと思い、こういう失礼な書き方をしてしまいました。

辻村さんが絵をお書きになるとは、私全く存じませんでした。あの方は人形つくりだとばかり思いこんでおりました。

私、あの方のつくられた人形の、人形芝居を一度だけ見

たことがあります。それを見た日からはじまった私の地獄（ああ、大げさな。あなたが新聞に四十代の女は、見六道の聖者だなど大見得をきられたのに、つい釣りこまれてしまったのでしょうか）の思い出があまりになまなましいものですから、私にとって、辻村さんは忘れられない人になっているのです。その後、テレビであの方のつくられた人形の芝居を見ましたけれど、丁度、その連続物の時間帯は、私、台所にいることが多くて、ほとんど見ることが出来ませんでした。それに滝沢馬琴の里見八犬伝という古い小説は、犬とお姫さまがセックスして子供が産まれるなんて、気味が悪い話で、好きではありませんでした。私はロマンティックな性質ではないのです。それに犬が、いえ猫も、私はちっとも好きではありません。

ところが、ある日、私は偶然、本屋の店頭で、あの方の犬にめぐりあってしまったのです。

夏の終りでした。今でもはっきり覚えております。

その日は出かける時は、もう秋の気配を滲ませた青空が高く拡がり、私がいつもの本屋に入りました時は、午後の強い陽ざしがまぶしくショーウィンドウの硝子に反射していました。

本屋の本棚の谷間で、次々手当り次第に棚の本を抜きだしては、時間つぶしをしている間に、十分ほどもすぎたでしょうか。突然、あたりが暗くなったと思うと、いきなりぱっと、店内の灯りがいっせいにかき消えてしまいました。表の大通りも、さっきまでの明るさは嘘のように昏くなり篠つく雨が降っています。停電の中で、客たちの口々にした短いことばがざわめきになり、本棚と本棚の谷間にこだまして、不気味なひびきをたてました。

丁度その時、私は一冊の真黒い本を手にしていました。読む目的も見る目的もなく、ただ時間つぶしに本屋を利用している私は、新刊の、どれもこれも似たような本の厚さや、活字の並び方に飽き、上段の大型の本ばかり並んだ中から、ふと、指にふれたそれを抜きだしたところだったのです。

真暗なつるつる光ったケースの真中に、稲妻のように一本白の線が貫いていると見た瞬間、さっと闇がその黒ごとのみこんでしまったのです。どういう心からだったのか、私は闇の中に手さぐりで本のケースから中味をひきぬいていました。闇に馴れた目に漆黒の中からまた黒い闇が引き出されるのが見えました。

黒のケースに入った黒の表紙の本だったのです。普通の本の二倍の大きさの持ち重りでした。私はケースを下に置き、両手で本を開きました。

その時、店内に明りが戻りました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の目にいきなりとびこんできたのは、今まで見つめていた闇の中から躍り出たような一匹の犬と、その性器でした。犬が先に目に入ったのか、その怒張した性器が先に目に入ったのか私にはわかりません。

白に黒いぶちの染められた犬は、無駄のないすっきりした背をのばし、これも如何にもたくましそうでいてスマートな四肢をひろげ力強く立ち上っていました。金襴のよだれかけのようなものと縫いぐるみの紐で飾られていましたが、それが王者の冠のように如何にもしっくり似合っていました。鋭い目といい、高貴な鼻筋といい、あらゆる万里の物の音を何ひとつ聞き逃しそうもなく、見るからに鋭敏に、花びらのように優雅につきたてられた真紅の耳といい、それは犬というより、何か不思議な霊的な使いのように見えました。

もちろん、それは、すでにテレビで私もなじんでいたあの方の八犬伝の八房という犬にちがいありません。

私は胸が早鐘のように鳴るのを感じました。すでに何か悪事を働いてしまった直後のように。

私がその本を、腕にかけたままの大きな紙の袋にすべりこませ、空のケースをもとの場所にさしこみ、何気なく書棚の谷を抜け、裏通りに面した出口へ出たのと、出逢い頭に彼に突き当りそうになったのが同時でした。

「どうしたの」

彼が私の顔に目をあてて、愕いたようにいいました。

「顔色が悪いよ」

「冷房がききすぎてたんだわ」

私は掌で自分の頬をさわってみました。ほんとうにぞっとするほど頬が冷くなっています。

「あれかい？」

並んで道を横切りながら彼が訊きました。

「一昨日終ったわ」

貧血性の私は生理の時、時たまひどい目まいをおこしたり、偏頭痛に苦しめられたりするのです。

外はまだ雨が降りこめていて、人々は雨宿りの出来る店の軒下や、ビルの入口や、地下道の口に雨をさけていて、車だけが濡れた獣のように背中を光らせて右往左往していました。

彼の頭髪も服の肩もぐっしょり濡れています。

「すぐやむよ」

誰かがいった瞬間、凄い雷鳴が鳴り、稲光りがひらめきました。きゃっという大げさな若い娘の悲鳴が華やかに聞え、つづいてはじけるような笑い声がおこりました。私たちのすぐ横で、ジーンズの少女が、やはりジーンズの髪の長い男の胸にしがみついて笑っています。

彼は雨宿りの人々の前を通って二、三軒先のビヤホールへ入っていきます。私もさりげなく彼の後を追いました。

店の中は雨をさけた人々で満員でした。ようやく壁ぎわに席を見つけて私たちは坐りました。壁の方に向いて私は手早く大きなサングラスをかけました。ついでに髪をまとめていたお下げどめを外し、指先で髪をかき下しました。そうすると、別人のように私の印象が変るのを知っていました。

このごったがえしの人の中に、万一、私の知人が、あるいは夫の友人がいたところで、とっさには私とは思われないでしょう。

彼がトイレに立った間に、私は口紅を塗り直し、頬にも紅をさしました。濃い色のサングラスの中に、表情のかくれた私の目が光っています。

彼が席に戻るのとほとんどいっしょにジョッキが運ばれました。まともに向きあって彼が陽やけしているのに気がつきました。

「海にいったの」

「沖縄へ取材に行って泳いできた」

色の黒いやせた、目ばかり大きな女のカメラマンのビキニ姿がちらと目の中を駈けぬけました。トップ屋と女カメラマン。

「ひとりで？」

彼は私の質問を黙殺してジョッキを傾け、さも美味しそうに咽喉に流しこみます。のばした首もシャツからのぞいている胸もたくましく陽にやけています。

私はまだ彼の裸を、海を背景に見たことがないのです。私より四つしか年下でない彼に、四十二歳の私は、肉体的にまぶしさを感じるのはなぜなのでしょうか。

ふいに、金襴の首飾りをつけたたくましい犬の姿が目の中をよぎりました。生命のみなぎっている美しい犬の性器、いいえ、あれは人間のものでした。私は全身に血がざわめきながら走りだすのを覚えながら、彼にそれが見せたくてたまらなくなりました。でも、それにしてもあの本は大きすぎ、目立ちすぎます。

「いいもの持っているの、あとで見せるわ」

小ジョッキの生ビールを三分の一ほどのみほしてから、唇をふきながら私はいく分浮き浮きした声でいいました。買ったといわず、持っているといった自分の表現の正確さに、ふっとおかしさがこみあげます。そういえば、あの瞬間の、いえ、あの直前の、胸のひきしぼられるような緊張感はどこにいってしまったのでしょう。あれほどのことを初めてしたというのに、この今の、何でもなさはどういうことなのか。私は、もう三年も前になる、彼とのはじめて

の秘密の時を持った折の、身のしびれるような緊張と、恐怖を思いだそうとしました。

そうです。あの時も彼に肩を押され、ホテルのドアの中へ一気に押し入れられた時、私は、もうすでに彼と軀を合わせてしまったようなとどろく胸の高鳴りを聞いてしまったのです。それでいて、その瞬間、頭の中も軀の中も真空のようにからっぽでした。その空洞は昏くはなく、燦爛と白金色に輝きわたるのです。丁度、さっき、黒い本を紙バッグの中にすべりこませようとした直前とそっくりに。

罪を犯す瞬間に、あれほど生命感にあふれ、光りにみたされるというのは、私ひとりの現象なのでしょうか。それとも、人間はそういう闇と光の不思議なからくりを抱いて、そもそも何物かに造られているのでしょうか。

はじめての不貞を犯した後で、私はホテルのバスルームの中に見つめた自分の顔の輝きを忘れることが出来ません。上気した頬にまだ濡れている目が自分のものとも思えませんでした。夫とのハネムーンのはじめての朝、やはり私は鏡の中にまじまじと自分の顔を覗きこみました。いつもより蒼白な顔色をして、髪が乱れ、目は不安そうに見開かれていました。唇は乾いて白っぽく、何だかそこが急にふけたように感じました。結婚式の三日前から出来ていた顎のにきびが、白粉を厚塗りされて、すっかり膿んで赤くふくれ上っています。

私は鏡の中の自分に思わずいいーっと歯をむきました。新婚の初夜を送った朝の、花嫁の幸福に輝く顔を、花のように美しく描いた小説を読んだことがありますが、あんなことは真赤な嘘だったんだなと思いました。私の小説嫌いは、もしかしたらその時芽ばえたのかもしれません。

祝福されて妻になったはじめての朝の自分の顔を思い出すにつけ、不貞を犯した直後の自分の顔の美しさが、ほとんど信じられないくらいでした。

彼は私の思わせぶりなことばに、ちょっと眉をあげただけで、私の頭ごしに窓の外の雨を見つめています。

彼が二杯目のビールを半分ほどのみあけた頃、雨が上りました。

いつものように、私たちは新宿の雑踏にまぎれながら、横町から横町へたどり、目だたない構えの家へ入っていきました。

看板も、植込みの埃まみれの青木の葉のかげになって、道路からはよく見えません。それでも一目で、私たちのような人間が必要としている家であることはわかります。

家にも表情があるものだということを、私は彼との秘密の情事を抱くようになってから知りました。幸福な家とか不幸な家とかは、玄関に入るなり、そこの空気が何となく

肌に教えてくれるものですが、罪の匂いのある家とない家は、外からの家の表情でわかります。ホモとか、レズの人たちが、すれちがっただけで相手の性癖を見抜いてしまうように、そういう家を利用する癖のついてしまった人間には、家の表情で、一目でそれと察しられるのかもしれません。

その家は一年ほど前に一度来たことがあります。でも彼はそれを全く忘れているのかもしれません。

私たちはいつも同じホテルを使うわけではないのです。いつでも彼の気まぐれで、行き当りばったりのように入ります。待ち合せの場所も彼の仕事の都合で、さまざまの町が指定されます。どの町ならどこの本屋でと、私たちの逢う場所は決っているのです。

どこの町にも横町に入りさえすれば、必ず私たちをかくしてくれる家はあるものです。

もう、数えきれないくらい、彼の背後について、そういう家に入って行ったくせに、私はいつまでたっても、そういう家の扉の中へ、一歩、踏みこむ瞬間の、めまいに似た緊張感に馴れることがありません。

どの家もホテルも、同じように似ていて、決して同じであったためしはないのです。

私は青木の葉の植込みと、そのかげの看板に見覚えがありましたが、彼の背後から玄関にすべりこみ、後手に戸をしめた瞬間、おや、ちがった家だったかしらと、思いました。

物音を聞きつけて、玄関のすぐ右手の部屋から、木製の玉すだれののれんを頭でかきわけて出てきた女の顔を見たとたん、あ、やっぱりと思いました。

右の目尻の下から耳へかけて、一面ケロイド状に皮膚がひきつれて光っている顔は、一度見たらそう忘れられません。左半分の無傷の色の白さと皮膚の美しさ、少し吊った切れ長の目と、品のいい鼻筋、並々でない顔立の美人でした。

女に案内されながら彼が、

「改築したの？」

と訊きました。女の顔を見て彼も思いだしたのでしょう。

「はい、洋間の御注文が多くなって」

女の声は低く静です。

こういう場所の女たちは、客の顔を一瞬に見てとって、決して客と視線を合わせないのだそうですが、この人は格別にそれを守っているようでした。

顔の半面が損われているため、表情が読みかねるということもあって、美しい方の顔にも能面のような堅い表情を凍らせたまま、部屋に案内したり、料金を受けとったり、

すべて一人ですませるのでした。
今はもうモーテルが発達していて、盛り場近くのこういうところを使う手合いは段々少くなっていて、昔ほどいい収入にはなっていないのではないかと、素人考えでは思うのですけれど、彼の話によりますと、結構、街でゆきあったふたりが安直に事をすませる場所としては、なりたつのだとかいうことです。
支払いはいつでも彼がします。でも、いずれ、私からも少しまとまった金を受けとるのですから、情事の費用は私もちといった方が正確でしょう。
冷蔵庫からビールやおつまみをひきだしながら、私はふと、
「いくつぐらいかしら」
とつぶやいてしまいました。
「誰が」
上衣(うわぎ)もシャツもぬぎすて、早くも具えつけの浴衣の糊をバリバリはがしながら彼がいいました。
「今の人、帳場の」
「あんたぐらいじゃないの」
「そうかしら」
私はむっとする気持をおさえこんでいいました。女が地味づくりのせいか、私は彼女の方が私よりもしかしたら七つ八つは年上だとふんでいたからです。彼は私の不機嫌に気づかないふうに、あるいはわざと気づかないふりをしてか、
「肌がきれいな女だよ、な」
「しらないわ、そんなこと、あなたさわってみたの」
「手を見ればわかるじゃないか、それに首筋だって」
私はもう相手にせず、自分も汗になった服や下着をぬぎ捨てました。力をいれてひっぱった拍子に、ブリキのように糊でつっぱっていた袖付がべりっとひきさかれてしまいました。
「あらっ、こまったわ、弁償しなけりゃいけないかしら」
「いいよ、そんなの」
「糊がとれれば紙みたいに弱ってるのよ、きっと」
私は何だか腹立たしくなって、また少し力をいれたら、またしてもべりっと、せんべいでも折れるように袖付がさけていきます。縫目ではなく、縫目から三ミリほど袖によったところが他愛なく破れていくのです。
彼はベッドに腹ばって、壁ぎわに据えたテレビに似た機械のスイッチをしきりにパチパチやっています。
「知ってるかい？　これ、ビデオ」
私は気味の悪い動物でも見るように、肩をひき、テレビかと思っていたその機械に好奇の目をあてました。

「どうするの、それ」
「撮るんだよ、そしてすぐ見るんだ」
「誰が」
「ここで寝る奴等がさ、おれたちみたいな」
「いやだわ」
私は思わず強くいいました。
「おいで」
彼はとりあわず、急に機嫌のよくなった表情で、乱暴に私の腕をつかみ、ベッドへひきずりあげます。
「いやよ、そんなの」
彼の指がおかまいなしにどれかスイッチを押しました。いきなり四角いスクリーンの両側にぎょっとするような強烈な照明がともります。
私は思わず両掌で顔をおおいました。その瞬間、彼は乱暴に私の浴衣をはぎとります。
またしてもべりべりっと、浴衣のどこかが音をあげ、破れるのがわかりました。
まるではじめて犯される少女のように、私はこの期に及んで、じたばたあらんかぎりの抵抗を試みました。
「みんな写ってるんだよ、ほら、そういうのがみんな写ってるんだ」
彼の声がぞっとするほど甘く耳もとでします。それは、写っているから、抵抗をやめろというようでもあり、写っているから、もっと暴れてごらんとそそのかすようにも聞えます。恐怖が私の手足に電流のように流れます。
証拠が残る。どんなことがあっても防がなければならない。私は目の中も口の中もからからに乾くように思いました。
彼が見せたことのない強さで、私を押えつけ、とげてしまいました。
その後、私はふっと全身から力がぬけたと思うと、自分でも信じられないような猛々しい力が新しく湧いてくるのを覚えました。
「見ろ」
という彼の声が、どこか遠くから聞えてくるようでした。深い沼の底に土に軀をこすりつけて眠っている魚のように自分のことが感じられます。
声は沼の厚い水の層の彼方からひびいてくるのでしょうか。
彼に髪をつかまれ首をひきおこされてしまいました。スイッチをどうしたものか、スクリーンに何かがうごめくのが見えます。
「あっ」
と顔をそむける私の頭を彼は両掌ではさみこみ、しっか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com